

実録フィクション

さいはての CMr (コンストラクション・マネジャー)

第 11 回

加納恒也
公益社団法人 日本建築積算協会
副会長・専務理事

【次号はいよいよ最終回】

あらすじ

予算の大幅超過により混乱を極めた「今宮市海崎プロジェクト」は、“おばあちゃん”の陰ながらの支援もあって、ようやく設計修補による工事継続と決定された。県の再審査、専門工事の入札、設計レビューによる変更対応などに追われる天野に、議会の特別委員会委員長から電話が。

- [登場人物] 天野清志：高尾建築研究所 チーフ・コンストラクション・マネジャー
高尾 哲：高尾建築事務所・高尾建築研究所 社長
春馬竜之：高尾建築研究所 コンストラクション・マネジャー
仲間真人：高尾建築研究所 コンストラクション・マネジャー
豊川久義：今宮市プロジェクト推進室長
内村利幸：今宮市プロジェクト推進室 課長補佐
石崎明人：今宮市プロジェクト推進室 主任技師
後藤良雄：今宮市プロジェクト推進室 係長
逸見紅郎：逸見建築事務所 代表取締役
長浦 浩：長浦構造設計事務所 代表取締役
岡本照泰：鷺田大学理工研究センター研究員、設計ゼネラルマネジャー
斎藤昭二：赤坂建設JV海崎作業所長
本田義男：赤坂建設JV海崎作業所次長

SCENE 30

海崎PJ特別委員会

委員会ヒアリング要請

「いつも急な呼び出しですいませんね。さあさあ、こちらへ。あら、春馬くん、ちょっと太ったんでねえか。」

内村は、いつも通り如才なく天野たちを会議室に導き入れた。

「まず、永野委員長からの電話の内容をお話しいただけませんか。」

内村に促された天野は、

「永野委員長からは、1月に、日程はこれから調整

するそうですが、特別委員会で弊社の高尾からのヒアリングを行いたい。1月議会に向けていくつか整理しておきたい。市長にもお話ししているとのことでした。」

「ヒアリングの内容については、何か言われていましたか。」

「特に具体的なことは言われませんでした。」

内村は、部屋の奥で腕を組んでいる豊川に顔を向け、

「室長、天野さんにお話ししてもよいですか。」

「俺から話そう。実は、以前問題になったそうだが、高尾建築事務所が、なんとリス方式の会員になったら海崎の入札に参加できるとか、会費は3,000円だとか、地元の業者たちにファックスを流したこと

があったようですな。聞くところによれば、おめさんが本社に乗り込み、社長を一喝して撤回させたとか。

あん時はうやむやに収まったようだが、またゾロ再燃して、特別委員会で究明しようとなったんだ。それ以外にも、定番となったが、3月に納品された最初の工事費設計書についての真相究明やら、設計修補をしたにも関わらず、現在、大幅な設計変更が生じてきたことについても関心を寄せている。」

「設計変更による増額については、議会が承知しているのですか。」

「特別委員会にだけは、おおよその状況を報告してある。金額は、天野さんの計算通りだ。」

ああ、ヤマ勘スーパーコンピュータ概算が一人歩きする。天野は“なるようになるさ”、と気を持ち直し、

「1月の特別委員会までには、金額を確定させます。ただし、タラソについては、4月頃まである程度の変更が出てくると思います。1月時点で、吸収できるような内容でまとめるつもりですが。」

「おそらく、もう増額はないだろうな、という質問だよ。その点はよろしく頼む。後は、杭の過大設計と補助金返還だろうな。CMの効果については懐疑的な議員が大半だから、特に地元は何のメリットもなかったというような意見も多いから、この点も説明が大変だよ。」

さて、こんなヒアリングになりそうだが、誰が出席して説明したらいいのか、そここのところだよ。」

豊川とともに、内村、後藤も天野を見つめる。

「委員長は、高尾社長の出席をお望みだが、彼が適切に説明できるか確信が持てん。口が先に生まれてきたようなところがあるし、話の流れで何を言い出すか。」

「市長を始め幹部連中も、そここのところを心配しています。1月の議会で工事費の増額を承認してもらうには、特別委員会を乗り切る必要があります。誠実に分かりやすく説明し、理解してもらえる回答者が必要です。」

内村が言葉を添える。

「しかし、先方は高尾をお望みですし、本人もやる気十分だと思いますよ。」

天野は、飛んできた火の粉を払う心境だ。

「高尾さんには、海外旅行に行ってもらおうか。正月から中旬まで。」

豊川の言葉に、

「豊川室長、それではあんまり高尾をコケにしませんか。なぜ、高尾が逃げ隠れしなければならんのですか。」

天野は、市のご都合主義に段々腹が立ってきた。

「天野さん、そんなに怒らないでくださいよ。実は、永野委員長は、内心では天野さんに出席いただきたいと考えているのです。プロジェクトもここまで進んできましたし、ことを荒立てても仕方ない、理解しやすい説明を受ければそこでまとめたいたいとお考えです。しかし、委員会には様々な議員もおりますので、一応建前から入ったというわけです。」

内村が、慌てて補足説明する。

「永野先生は、今期で市政を卒業し県政に打って出るつもりだから、この特別委員会を花道にしたいと考えているようだよ。これ以上混乱しても、誰の得にもならないよ。混乱自体が目的の連中は別だがな。」

豊川は、すでに委員長と話をしているらしく、“頼む”と珍しく頭を下げる。

「分かりました。私の経験した範囲内でしっかり説明します。聞いただけのものは、そのように言いますよ。後は、高尾から私に変わる手続きを、高尾も交えて進めてください。くれぐれも、梯子を外さないようにお願いします。」

「了解した。天野さんには迷惑をかけないように進めます。」

「それでは、これで失礼します。」

“これで十分迷惑なのだが”と天野は苦笑いととも立ち上がる。

海崎PJ特別委員会

1月10日午後から、海崎PJ特別委員会が開催された。当日の議題は、高尾建築研究所の天野清志からのヒアリングである。出席委員は9名で、様々な立場の議員で構成されている。

「所属とお名前をお願いします。」

質問が始まる。

3月20日に納品された設計図書と工事費設計書

について価格の算定基準、積算間違いの原因と責任、高尾建築事務所がCMを優先して積算をおろそかにしたという岡本の主張などについて、複数の議員から質問が出る。内容は従来の域を越えず、天野の回答も従来説明した内容と大きく異ならない。

設計修補における価格算定基準についての質問の後、

「現在、設計内容を再検討し、工事費がまたも超過するといった状況が報告されていますが、修補設計が不十分だったことが原因ではありませんか。」

核心となる質問だ。

「元々、当初の設計はデザイン重視で施設としての機能性に関し十分検討されていませんでした。修補時においては、当初の設計に基づき、その時点の機能や品質を低下させないよう再設計したわけですが。修補後に、工事着手し、関係者で改めて設計内容を確認していきましたが、根本的な問題も多く指摘されました。市が要望したにも関わらず、デザイン面で不都合があるとの理由で設計者が採用しなかったものも多く、検討による工事費の増額も多額なものとなりました。」

「現在、約2億円の増額との報告を受けていますが、これ以降、また増額の可能性があるのでしょうか。」

「実際の工事費増額は、約2.8億円です。今回の専門工事の入札に伴う、予算と入札結果の差額は約8,000万円となっていますので、差し引き約2億円の支出が増加すると考えています。市からは、今後の増額はないようにと指示されていますので、その方向で努力するつもりです。」

「設計修補で無駄になった杭が13セット出ているが、修補以降に無駄になった杭はあるのですか。」

「設計修補の内容を見据えながら杭を施工しましたが、結果としてあと1セットが無駄になってしまいました。」

「結果的に過大設計となった金額は補助金の返還対象となると思われるが、どのように進めているのですか。」

「県の農政振興事務所と打合せしながら、設計と積算を行っています。」

案の定、高尾が自社の『アリス』方式の会員を勧誘する形で、今宮の各企業に入札参加文書を配布し

た事件についても質問があった。これは元々、今回のCMがスタートした時からの計画であり、その後工事費設計書の改ざん問題で状況が一変したにも関わらず、本社の事態を認識していなかった、いわば能天気な行動であった。

天野は、率直に過ちを認め、その後の対応について説明した。

最後は、CM導入の効果であるが、予算と入札結果との差額が一定のものとなったこと、2次下請を含めると地元で一定の経済効果があったこと、などを説明した。当然、無理な工期で補助金をクリアする出来高を確保した点にも触れ、CMに対する正当な評価をお願いした。

「委員の皆さん、ご質問はこれで最後のようですね。天野さん、長時間にわたり丁寧にご説明をいただきありがとうございます。これで終了いたします。」

「ありがとうございました。失礼いたします。」

帰りに、本館の向かいにあるプロジェクト推進室に立ち寄り、内容を報告する。その場で確認しながら記録を作成し、春馬の車で現場事務所に帰ることにした。

さて、次はいよいよ、工事費変更を議会に上程する段階だ。しばらくは、資料作成に追われることになるだろう。

SCENE 31

工事費変更

変更積算

11月の下旬に、仲間真人が本社に帰った。交代要員として、菊川進が着任する。仲間は、本社にあって、設計変更の積算チーフとして全体をまとめる役割を与えられた。高尾建築事務所の積算の技術レベルを承知している天野が、少しでも不安を解消しようと吉野と打合せしたことによる。これが後に功を奏し、危機を乗り切ることになる。

480項目にわたる設計変更は、すべて指示書としてまとめられ、図面(スケッチ含む)あるいはメー

カー見積書などの必要資料が添付されている。一連番号により台帳で管理するシステムにより、確実に設計図と積算に反映できるようになっている。

高尾本社では、12月に入ると、建築・電気設備・機械設備に分かれて、変更指示書を積算し、設計変更後の工事費設計書を作成する作業に入った。また、専門工事会社およびメーカーからの変更見積りの徴集は、現地共々役割分担を決め、最終価格の交渉も並行して行うことになった。

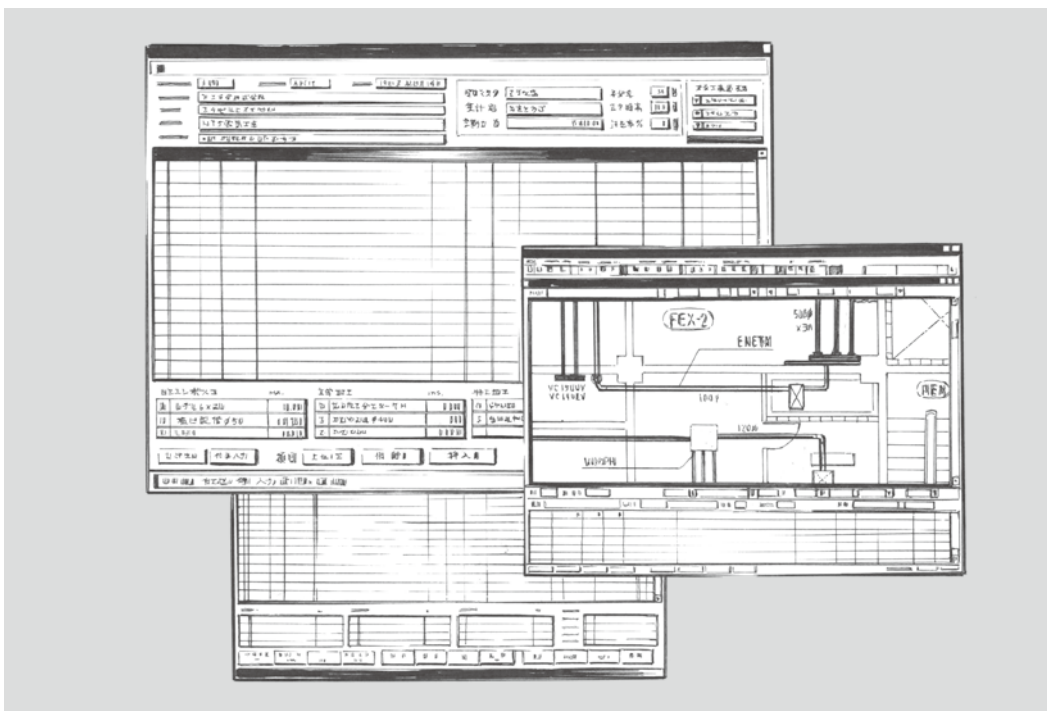
今回の設計変更が公には最終工事費となることから、市も総動員で積算チェック体制を整え、万全の形で最後のまとめを行うよう、豊川室長から檄が飛んだ。

しかし、天野としては、ここで大きな不安要素を抱えることになる。高尾建築事務所では、大竹専務を中心に、コンピュータの活用を積極的に進めてきた。リアス方式による分割発注型CMの会員登録と入札システムについても、いち早く開発し稼働していたのだが、高尾社長の要求レベルが高く、海崎プロジェクトに合わせて、より効率的な入札システムの開発に取り組んでいた。ひと騒動あった、地元企業へ入札参加のために入会を働きかけた件も、元をただせば、今後のために無理を承知で新しい入札シ

ステムを今回のプロジェクトに導入しようとする、高尾の確信犯的な行動であった。天野には、高尾の気持ちが十分わかっていたが、市の状況を鑑みて、お互いそれ以上踏み込むことなく、行き違いという形で決着したのが実情であった。

その後、高尾は、ターゲットを切り替え、設計変更を分類集計し、変更前・変更後の工事費設計書を作成するソフトの開発を進めていた。現在はまだ開発途中であるが、今回の設計変更の積算に活用し、このシステムを売り出そうと考えていたのだ。大竹が一所懸命に開発しているので、うまく使えば良いとは考えているものの、プログラムのデバック(不具合修正)期間もほとんどなさそうで、“本当に大丈夫かね”という不安は拭えない。高尾は、豊川たちプロジェクト推進室のメンバーに、新しいプログラムを活用し、早々に結果をお見せしますなどと吹きまくっていた。

12月から準備を始め、年末年始を挟んで、1月12日に変更後の設計図書と工事費設計書(変更増減対比内訳)を提出する。市は1月13日から内容チェックを行い、1月20日に最終の確定を行い、23日には議会で工事費変更の承認を得る。またまた、なんと



もタイトでアクロバティックなスケジュールである。

実際には、設計定例と工事定例において、様々な変更要素が議論されているのだが、とにかく、12月初旬で一旦内容を確定し、以降については予算の枠内で仕切っていくしかない、関係者間では合意している。設計修補の時もお盆休みを返上しての作業だったが、今回も最小限の休みしか取れない。仲間をはじめ本社のメンバーには申し訳ない気持ちで一杯だ。一段落したら、彼らを今宮に呼んで大騒ぎするか、天野は気を紛らわすように思いを巡らす。

まだか？

1月11日の朝、完成した工事費設計書データがメール送付され、現場事務所でプリントしファイル作成を行う予定であった。春馬と菊川は、早々にファイルやインデックスなどの道具立てを用意しており、今か今かとコンピュータの画面を眺めている。

「天野さん、なかなか来ませんね。仲間さんに聞いてみましょうか。」

菊川の問いかけに、

「あまり急かしても気の毒だから、午前中一杯待ってみよう。仲間くんか吉野さんから連絡が入るかもしれないよ。」

12時近くなった頃に電話が鳴った。

「天野さんですか、吉野です。コンピュータの具合が悪くて、少し遅れています。今日中には送れるように頑張っていますので、よろしく願います。」

「分かりました。お手数をおかけしますが、よろしく願います。」

今日中とは、深夜0時までだな。プリントしてファイルを作成するには6時間はかかるから、今夜は徹夜を覚悟することになる。春馬と菊川にも伝えて、夜食の用意もしなければ。この寒さでは、毛布も必要だな。天野は、明日の朝に市へ提出する段取りを考えながら、昼食の仕出し弁当を取りに席を立つ。

深夜0時を過ぎても、メールは届かない。さすがに、イライラしてくる。吉野に電話を入れよう。

「天野さん、済みません。今連絡しようとしたところでしたが、コンピュータが動き始めたのですが、また止まってしまって、今大竹専務がプログラムの

チェックをしているところです。」

「設備関係はどうなりましたか。せめて、電気設備と機械設備でも送れないでしょうか。」

「設備も同じシステムに乗っかっているもので、やはり進んでいません。」

「見通しはどうなのでしょう。市では、明日朝から8名の職員を用意して待っています。」

「大竹さんに確認して、また連絡します。申し訳ありません。」

これでは、朝まで待ってもできあがらないな。明日朝には、市に連絡を入れなければ。それにしても、スケジュールを確約できそうもないし、こちらでは何もできないし。若い衆には仮眠を取らせても、自分は起きていなければならないな。さて、市にはどのように説明するか。

翌朝、8時半に、石村に電話を入れる。

「えー、コンピュータの調子が悪くて積算が進まないって。先日高尾社長がこちらにみえた時には、“最新のシステムで積算をします、あつという間に結果を出しますから、乞うご期待”って言ったっけな。どうなってるのかね。」

「申し訳ありません。私もどうなっているのか状況がよく理解できていませんが。とにかく、本社ではプログラムの点検を行い、復旧を目指していますので、本日の納品は延期させていただきます。また連絡します。」

天野は、徹夜あけで腫れぼったい臉を揉みながら、春馬と菊川を振り返る。

「吉野さんに電話を入れてから、飯を食いにいこう。温かい味噌汁が飲みたいな。」

結局、12日もデータは送られてこなかった。市からは頻りに電話があり、天野はただただ謝るだけだった。先方も、天野に言っても暖簾に腕押しといったことから、午後からはしばらく連絡が途絶えた。夕方本社に電話し、一向に進展がないことを確認した段階で、天野は市役所に向かった。

「申し訳ありません。こちらに参りましたが、新しい状況報告はできません。今後の対応について、少し考えることがありますので、これから本社と打合せします。明朝に、改めて具体的な報告をいたし

ます。本日はこれで失礼します。」

豊川も内村も、怒りを口に出すことはせずに、黙って頷いた。

現場事務所に帰り着くと、大竹専務に電話を入れる。

「もしもし、大竹専務、天野です。プログラムの状況はいかがでしょうか。」

「天野さん、ご迷惑をおかけしています。なにせ開発途上のものを動かしていますので、ある程度進むと止まることがあります。つきっきりで動かしているため、完了が見通せない状態です。」

「大竹さん、そのような事情は初めて聞きました。それでは、最初から、今のプログラムを使用するのは無理だったのですか。」

「一応、動く成算はあったのだが、冒険過ぎたと反省しています。まあ、社長がどうしても使いたいと言い張ってね。」

「そうでしたか。積算自体は仲間くんが中心となって進めてはいるのでしょうか。」

「仲間くんは頑張っていますよ。プログラムがうまく動けば、結果はすぐ出てくるんだが。」

「実は新しい提案ですが、プログラムの使用を断念して、エクセルを使い力仕事でまとめていただけませんか。時間はかかるにしても、先が見えます。スケジュールを検討いただき、市に確定した予定を伝えたいと思います。必要であれば、社長に話しますが。」

「天野さん、わかった。私がおっと早くそのような決断をすればよかったんだ。社長には私から話します。私も仲間くんと一緒に力仕事をしますよ。今日中にスケジュールを連絡します。」

「ありがとうございます。よろしく願います。」
続けて、仲間に電話を入れる。

「プログラムの状態は、今大竹さんに聞いた。プログラムの使用を中止して、エクセルでまとめあげてくれないか。」

「私もこのままでは進まないと思い、内緒で集計作業に入っています。プログラムが動き出すのを黙って待っているわけにはいきませんから。」

「仲間くん、ありがとう。大竹さんと打合せして、まずスケジュールを教えて欲しい。よろしく願います。」

します。」

仲間のことだ、きちんとまとめてくれるだろう。23日の議会までに、ますます残り少なくなってきたが、さてどのように進めるか、こちらのスケジュールは俺の担当だな。

14日の朝方、待望の工事費設計書データが送られてきた。容量の関係で、かなりデータが細分化されているが、春馬と菊川は早速プリントを始める。現場事務所の備品購入は節約を心がけていたのだが、商売柄プリンターだけはかなり大型で速度の速い機種を選んだ。今、その成果が出て、リズムカルに用紙を吐き出している。一部のデータは、市役所において、プロジェクト推進室のプリンターから印刷してもらうことにした。13時には、ようやくファイルと電子データのCDを市に納品することができた。ただし、作業中に垣間見たところ、内容についてはこちらでもチェックし、一部修正する必要があるようだ。まだまだ、気は休まらない。

議会に向けて

公共工事においては、RIBCというプログラムを使用するケースが多い。しかし、今回のプロジェクトにおいては、構成が特殊であることから、エクセルで内訳明細書を作成している。設計変更による工事費増減については、RIBCは変更前後が上下2段の表示となるが、エクセルの場合は、見易さと計算の効率性から、1行に左右表示が便利である。ところが、役所にはこの論理が通じない。慣例にこだわる市および県の頑強な抵抗があり、それでも粘り強く説得した結果、ようやく天野の提案はOKとなった。まったく公共の壁は岩盤だと、1年近く公務員と一緒に仕事をしてきた天野は、つくづくと思う。

議会への説明資料についても、打合わせが繰り返される。特に、設計変更の妥当性、設計修補に瑕疵がなかったという説明も重要である。議員が理解しやすい説明資料をどう作るか、市と天野の間で様々な検討が続けられる。

また、3か月の工期延長に伴う、統括施工管理会社(建築・電気設備・機械設備)の現場管理費(フィー)の増額も変更対象となる。今回の工事費設計書は、一般の公共工事の積算基準と異なり、人件費その他

の細目を全て積上げる形で現場管理費を積算している。しかし、入札後、落札者との内容確認を行っていなかったため、金額変更協議のため、統括施工管理会社から提出された内訳明細では、現場管理者人件費の単価等に大きな差異を生じ、双方合意するまでにかなりの時間を割く結果となった。

工事費設計書のチェック・修正も進み、議会説明用資料もおおよそ出来上がってきたある日、またまたハプニングが発生した。昼過ぎの市役所で、23日議会に向けて最後の内容確認をしていた時のこと、内村が、

「そういえば、工事費の増減額1.95億円は、請負金額ベースですよ。」

と確認してきた。

「違いますよ。工事費設計書つまり予算ベースの金額ですよ。ただし、工事費設計書と請負金の差額、つまり予算残を差し引いた金額ですが。」

「えー、まさかと思ったけど。実は、特別委員会に請負額の増加分だと説明しているんですよ。設計額と差があるんですか。」

「今までも、設計額の増加分とはっきり説明していましたが。なぜ行き違ったのでしょうか。請負額は2.02億円、700万円ほどの開きがあります。」

「ぜひ、700万円を下げてください。このままでは、議会に説明できません。明日中に修正してください。」

内村は、パニックになったようにまくし立てる。11日から断続的に徹夜が続いていた天野は、冷静でいられる状態ではなかった。

「内村さん、いい加減にしてください。先ほども言いましたが、設計額の増加分ということは、再三説明したはずですよ。特別委員会に請負額と報告したのは、内村さんの勘違いから出たことです。間違っていましたと委員会に報告すればいいじゃないですか。これ以上、我々に無理を強いないでいただきたい。今も2日徹夜で、我々3人は倒れそうな状態です。とにかく、これから一旦帰宅して、睡眠を取らなければ倒れてしまいます。」

「天野さん、お怒りになるのはもったもですが、役所というところは、簡単に間違っていましたと修正できるところではないんです。夕方6時にお迎えにあがりますので、なんとか700万円を圧縮してく

ださい。」

「天野さん、なんとかお願いします。必要な事務作業はこちらでも引き受けますから。一旦は、仮眠してください。」

横柄な豊川も、さすがに腰を低くして頼み込む。天野もこれ以上我を通すわけにもいかない。

「分かりました。一旦睡眠をとってから考えましょう。春馬・菊川、さうしよう。」

結局、予備費的な項目の圧縮を主に、翌日までに金額調整が行われ、無事議会への報告がされた。ただし、23日には議決まで至らず、28日になり、ようやく工事費変更は承認の運びとなった。

SCENE 32

出来高必達

変更工事費の確定に引き続き、3月末の出来高、特に交流施設の補助金対象工事に関する出来高確認が始まった。工事費設計書により項目・数量の出来高を算定する。内訳明細の右に出来高算定用に数量～金額欄を用意し、出来高の数字を入れていく。

工事定例においては、目標工程通りに施工が進んでいるかチェックが行われ、内訳明細の数字との整合を確認していく。以前から懸念されていたことであるが、設備関係の工程が遅れ気味で、機器の取り付けが間に合わないことが改めて確認された。

「出来高検査には、機器類の製品も含めましょう。現場に展示スペースを確保すればよいでしょう。」

天野の提案に、

「天候が不順ですから、床には排水を考慮して、上家のテントもかけましょう。また、別途に保管用倉庫を用意する必要がありますね。」

斎藤所長が提案する。

「規模の制約はありますが、当社の倉庫が提供できるかもしれません。」

小田電業社長の山中からの提案である。

各統括施工管理会社が、施工状況の確認とメーカーの製作状況および現場搬入可能時期の確認を行い、2日後に天野まで報告することとなった。

補助金のために必要な出来高は、約6億9,000万円であるが、天野が事前に算定したところによれば、

実際には約7億3,000万円になる見通しである。どうやら、目標出来高をクリアーできる見通しが立ったようだ。

SCENE 33

異変

2月に入ってから天野の体調は思わしくない。疲労がかなり蓄積しているようだ。肩から首にかけての凝りが重苦しく、明け方に寝汗で目を覚ますことも度々ある。医者に行って、何がしかの薬をもらったり点滴をうってもらったりと、いろいろやっているつもりでも、それほど効果がないようだ。

逸見などは、

「天野さん、とにかくストレスからきているのだから、少しのんびりするような気分転換が必要だよ。酒だけじゃストレスは発散できないよ。」

と言って、午後の早い時間帯にドライブを誘いに来て、見晴らしの素晴らしい阿弥陀が浜や近場のあちらこちらに連れて行ってってくれる。確かに、澄んだ

空気と風光明媚な景色に接すると、体もなにやら軽くなる。何よりも、逸見の心遣いが心の支えに感じられる。

今年度の出来高確保の見通しがつけばしばらく余裕ができそうだ、あと2週間か、と考えていた3月半ばの午後、天野は、左側頭部に間歇的な痛みを感じた。時間とともに激しくなってくる。

「春馬くん、頭痛がひどくなってきた。今日は帰って寝ているよ。」

自宅で横になったものの、天野の痛みは消える気配もない。夕方、市長が経営する熊本医院に行き、鎮痛薬をもらって来る。熟睡ができないまま、翌朝目を覚ます。朝になれば、頭痛が消えることを期待していたが、痛みはさらに増す一方だ。今日も休むと春馬に告げ、再び熊本医院に行くが、やはり鎮痛薬を渡されただけだ。

結局、その晩は一睡もできず朝を迎えた。我慢の限界は超えている。

「春馬くん、至急救急車を呼んでくれないか。頭痛がひどくなって、我慢できない。2日にわたる激しい頭痛だと言ってくれ。」

次号(いよいよ最終回)に続く

この物語はフィクションであり、登場する機関・企業・団体・個人は実在のものではありません。

積算協会ホームページに掲載されています。

